

～医療を巡る人権～

～ハンセン病回復者～

「大分が一番いい。ふるさとが一番。」

1996年にらい予防法がなくなるまで、ハンセン病回復者の方々は、理不尽な隔離を続けられました。14歳の時にハンセン病と診断され、鹿児島県鹿屋市の星塚敬愛園に収容されたSさんは大分県ご出身の83歳。カラオケがとっても上手で明るい方です。

らい予防法が廃止されても、ほとんどの入所者は高齢のためや体調の悪化、そして帰る場所がないなどふるさとに戻ることができず、療養所で生活を続けています。

○星塚敬愛園に入所するまでの経緯を教えてください。

耳鼻科に行った時、医師が父親だけを呼びました。そのとき、私の眉毛が薄かったんです。眉毛が薄いというのは、ハンセン病の特徴でした。その次の日から、「学校に行かなくてよい」と言われました。家から出てはいけない、私が使用した食器類は別にして洗うなど、家族内でも隔離がはじまりました。約半年家の中にこもる日々が続きました。ある日、県から、近隣の保健所に来るよう連絡がありました。そこで、「遠い所に行ったら治るよ」と言われました。昭和23年早朝、県から迎えに来たトラックの荷台に父と2人で乗り、大分駅まで搬送されました。どこに行くのか不安で仕方ありませんでした。父と一緒に列車に乗り、鹿屋まで搬送されました。駅に降りてから、またトラックで星塚敬愛園に連れてこられました。到着してすぐに父とは引き離されました。偽名をつけられ少年寮に入りましたが、最初の日の夕食は今でも忘れられません。汚いほうろうのさびた器にカボチャなどが入っていましたが、とても食べる気がしませんでした。

○入所後の生活を教えてください。

園内にある学校に通いました。患者と敬愛園の職員が教えていました。自分が行き始めたときに、鹿屋市内の学校の分校となり、教育が充実しました。運がよかったんですね。音楽やエスپرانت語なども習いました。

昭和24年に特効薬「プロミン」が導入されました。本当によく効きましたよ。顔の腫れがみるみるうちに引きました。「あーよくなっているなあ。」というのが実感としてありました。昭和40年までは、入所者が園内の作業や仕事をするのが続きました。自分は会計係をしていました。食糧難で物もなく、白衣を染めて背広を作ったり、配給の炭は食料と交換したりしました。寒いときは障子の棧を燃やして暖をとったりもしましたよ。

園内で結婚しましたが、当時夫婦一室に住むには断種手術をしないと許可されませんでした。私たち夫婦の子どもは強制的に墮胎をさせられました。悲しい記憶です。

○ふるさとに残ったご家族のことを教えてください。

私のことで、家族は苦勞をしました。特に水には苦勞をしました。近所の人が共同の井戸を使わせてくれないんです。夜中でも見張りがいました。仕方なく、道ばたの汚い水をくみ上げ、煮沸して飲み水にしたり、風呂の水に使いました。風呂の水は赤かったです。

○園外の人とのつながりはどうでしたか。

園内のグラウンドに、鹿屋市役所の職員が野球の練習に来たのが最初です。自分も野球をしていました。ゲートボール交流や、芸能人の慰問も始まりました。

こんなこともありました。ゲートボールの全国大会で、星塚敬愛園のチームが東京に行き、第2位になりました。ハンセン病回復者であることがわかるのが嫌で表彰台に上がらなかったら、主催者がハンセン病であったことを恥じることはないから、上がってといわれました。うれしかったし、ハンセン病が世の中に認知されたと感じました。

1996年にらい予防法がなくなり、格段に生活は変わりました。しかし、隔離政策によって人生の大半を奪われ、夢や希望を絶たれてしまいました。法に苦しめられました。

○現在・今後のことについて教えてください。

来園者があると順番で講演をします。また、4年前に別府市で講演会をおこないました。正しくハンセン病のことを知ってほしい。それと、大分県に里帰りするのが楽しみです。毎年里帰りしています。大分の方がこちらに訪ねてくださっていろいろとお話することも楽しみです。大分県はいい。やはり、ふるさとが一番です。この星塚敬愛園の入所者は最も多いときは1347人(昭和18年)もいましたが、今入所している人は129人(平成30年6月末現在)となっています。この療養所での生活をいつまで続けられるのか不安です。他の高齢者の方もそうだと思いますが、自分が住みたい土地の病院や施設に入ることができればいいなあと思います。